

市史通信

【目次】

- 開港九〇年記念事業
- 記念絵はがきと記念スタンプ
- 横浜大空襲罹災の実相
- アンケート集計結果より
- 開架資料紹介『横浜の町名』
- 市史資料室たより



「おもいでの開港展」横浜YMCA会場内の様子 1948年

第28号

【発行日】2017年3月31日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜市中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 so-sisiryu@city.yokohama.jp
 【ホームページ】
 http://www.city.yokohama.lg.jp/
 somu/org/gyosei/sisi/

開港九〇年記念事業

横浜市は、一八五九（安政六）年横浜開港から、「周年」や「年目」の区切りの年に記念事業を行ってきた。太平洋戦争直前、戦時の一九三九（昭和一四）年六月二日開港記念日にも、「事変下に於ける厳粛と緊張とを趣旨としてお祭騒ぎの催しは廃することになつたが」、「折柄九号岸壁繋留中の郵船榛名丸（一萬四百噸）上甲板に於て」祝賀会が行われている（『横浜市報』三九年五月二五日、六月八日）。

次の区切りである一九四八（昭和二三）・四九年は占領下であった。そのため大々的な行事は行われていないが、関連の行事と展示会等が行われている（曾根妙子二〇〇二）。四八年六月二日には、運輸省第二港湾建設部と横浜市の共催により、高島埠頭において横浜港建設復興式が行われた。併せて二港建では、小冊子『横浜港の再建』を六月二日付で発行している。また、六月二日から六日まで「開港九十年記念 おもいでの開港展」が市民生局文化課によって開催されている。ここでは、部分的に紹介されている関係簿冊「開港九十年記念 おもいでの開港展関係書類」（横浜市各課文書二八）から、この展示会について紹介しよう。

「おもいでの開港展」展覧会要項

この「開港九十年記念 おもいでの開港展」が、いつ頃に企画されたのか

は不明だが、準備委員の第一回打合会は、六月二日の一箇月前の五月三日であった。打合会は、その後、一二・一八・二〇日に行われている。「展覧会要項」では、名称は「おもいでの開港展」、会期は六月二〜六日の五日間、会場は横浜YMCA (Young Men's Christian Association)、横浜市・

表1 「おもいでの開港展」準備委員

所属等	名	前
横浜ユネスコ協力会	秦孝治郎、吉村昌雄	
YMCA	森栄一、海老沢廉、広田兼敏	
企業	李家孝（三菱重工業）、箕浦多一（日産重工業）	
商工会議所	赤尾秀高	
史料関係	青木純二、軽部三郎、中島満洲夫、軽部亀松、海老沢有道、飯田九一、添田坦、池谷健治、熊原政男、岡本孝正、石野瑛、丹波恒夫、関靖、田中佑幸、牛田鶏村、岡本三郎、長尾静明	
市政記者室	河村貢、小貫喜堂	
文化政策委員会	上條治、木村実	
横浜市	藤野千萬樹、菊谷勇夫、田代政治、吉田仁吉、彦由亀一、玉岡三男	
幹事	小川喜代司、石井光太郎、森田亀太郎、大杉束、土田豪州、茨木彦蔵	

Y M C A・横浜ユネスコ協会の共催であった。なお、最初の文書では雑誌



写真2「おもいでの開港展」会場 中区山下町



写真1「おもいでの開港展」ポスター

「月刊よこはま」が共催に記載され、訂正で同誌を編集していた横浜市文化政策委員会が記載されたが、これも削除されて三者の共催となった。写真1のポスターなどを見ると、横浜商工会議所と神奈川新聞社が後援となっている。

当時、横浜Y M C Aは中区常盤町の会館が米軍に接収されており、山下町の旧市立女子専修学校の建物を借用していた。横浜市の会場となるような施設の多くは接収されていた。

横浜ユネスコ協力は、同年五月八日に、会長秦孝治郎・副会長大隈信幸を選出して発足したばかりであった(神奈川新聞五・九)。

展示会の準備委員は、表1にあるように共催の三者の他に、商工会議所や企業、横浜市史料調査委員や史料所蔵者、新聞関係、共催にはならなかったが文化政策委員会からも選ばれている。

展示内容は、「写真、絵画、絵図等を中心とする横浜開港当初より明治中期に至る間のいろいろの動き」となっており、開港から明治中期までの展示であった。

市役所内における経費の負担は、民生局が文化振興費の補助負担金及交付金から二〇、〇〇〇円、教育局が社会教育費から二〇、〇〇〇円となり、主管は民生局文化課であった。予算では、この他の収入として入場券売上金一六〇、〇〇〇円を計上し、計二〇〇、〇〇〇円が総予算であった。

「おもいでの開港展」開催

神奈川新聞では、六月二日の紙面に本日から開催の記事を掲載している。「門外不出の逸品ぞろい」との見出しで、絵画・写真など「貴重品三百点が出陳される」と報じている。また、「すでに市内各高校、中学、小学校など七十数校から団体参観の申込み」があり、五日間の期間中に「十万人余の入場者が見越される」と報じた。一日当り二〇、〇〇〇人となり、かなり強気の予想をしている。

展示会場となったY M C Aには、写真2のように入り口には黒船を模したアーチを設置している。実際の展示会場は写真3のように比較的広い場所に展示されており、講堂か体育館と思われる。内部の清掃を行い、写真に見える白線も新しく引かれている。

さて簿冊には、準備段階の資料は第一回打合会の資料のみである。それ以外は、展示が終了した後の精算関係の資料である。次にこれらの資料から、実際の展示の一端を見ていこう。

「開港九十年記念 おもいでの開港展出品目録」では一三四件が掲載されている。この出品目録では(一)(二)や其一其二となっている項目もあり、「展覧会概況」では出品数が一六一点となっている。なお出品目録は一枚二円で販売していた。

展示の構成は「昔の横浜」・「開港前後の横浜」・「横浜開港当時」・「明治初年の横浜」の四部となっていた。このうち、「横浜開港当時」が六五件、「明治初年の横浜」が四五件とこの二項目が主で、開港前を示す「昔の横浜」は二件だけであった。

展示品をみると、例えば「横浜開港当時」では、大平録御貿易場・オロシヤ国船略図・海陸御固泰平鑑・神国泰平施品鏡・横浜仏国役館の全図・横浜海岸フランス役館の図・横浜交易双六・於横浜無類絶妙英国の役館・亜墨利加蒸気船・亜墨利加大船の図・横浜各国商館の図など横浜浮世絵が主な展示品で、他の部も若干の地図類のほかは浮世絵が主なものであった。



写真3「おもいでの開港展」展示会場内の様子

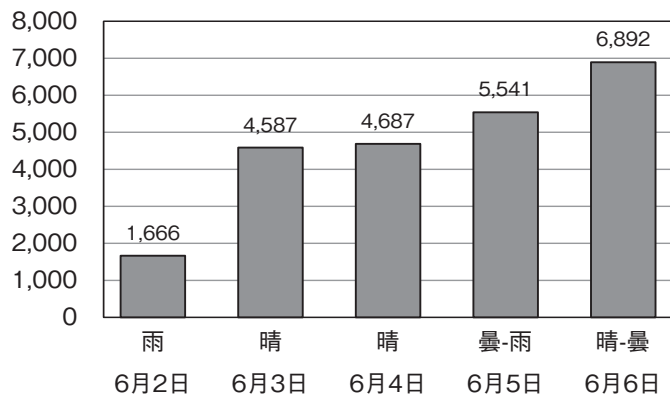


図1「おもいでの開港展」入場者数

それぞれの資料の所蔵者は分からないが、多くの資料は、史料関係の委員が提供したものである。なかには、青森県中津軽郡や群馬県吾妻郡へ借用等に赴いていることが、交通費の「請求並領収書」から判明する。

これらの展示品の多くは、写真3にあるように額に入れられている。このような額が無い資料のために、ガラス入り額三五枚を購入している。

入場者数と収入

六月二日から開催された同展は、初日と四日目（六月五日）に雨が降ったが、三日間は晴・曇と比較的天候は良好であった。

入場者数を見ると、図1にみるよう



写真4「おもいでの開港展」入場券

に、初日の二日は一、六六六人と少なかったが、翌三日には四、五八七人となり、五日には曇のち雨にもかかわらず、前日から約八五〇人が増加して五、五四一人の入場者数となり、最終日の六日には六、八九二人となっている。先に見た新聞記事の予想一〇〇、〇〇〇人余には遠いが、一日平均四、七〇〇人弱、合計二三、三七三人の入場者数となった。

発売された入場券は二種類あり、団体入場券が二円五〇銭、会場売り入場券（写真4）が二円九九銭であった。区分別の入場券の発売枚数と売上高は、団体入場券が五二、〇九五枚、売上高一三〇、二三七円五〇銭、会場売り入場券が四、二九六枚、売上高一二、八四五円〇四銭であった。

先の新聞記事で報じられていた通り、小中高校の団体による入場者が多く、団体入場券は会場売りの一〇倍以上となっている。また、実際の入場者数は、入場券売上枚数の半分以下となっており、団体入場券は使われなかった券も多かった。

この他、先に見た会場で販売した目録が二、三一六枚、四、六三二円の売上げがあり、雑収入一円三六銭を加えると総収入は一四七、七一五円九〇銭となった。この数字は、先に見た収入予算には届かなかった。

支出の内訳

横浜市負担分を除く支出は、①打合会議費四七、一七〇円、②会場設備費二五、五五〇円、③看守及夜警費一七、九五〇円、④印刷費二五、〇〇〇円、⑤出品者謝礼費一、二〇〇円、⑥消費費八、九五二円、⑦通信費四〇〇円、⑧交通費六、五九〇円五〇銭、⑨賄費三、九五〇円、⑩雑費一六、〇九〇円、計一五二、八五二円五〇銭となった。この結果、差引五、一三六円六〇銭の不足となった。

この不足分は、共催のYMCAと横浜ユネスコ協会の負担となった。また、先に見た民生局・教育局の各二〇、〇〇〇円は、この会計とは別に会場設備費として支出されており、内訳は不明だが、おそらく入り口の黒船アーチなどに使われたのであろう。

支出の中では打合会議費がいちばん大きく、四回の打合会と終了報告会で延一五二人分の食事代となっている。次いで会場整備費が大きい。これは先に見た額代であった。

印刷費では、入場券一〇〇、〇〇〇枚、ポスター五〇〇枚、目録三、〇〇〇枚であった。先の新聞の入場者予想

は、入場券の印刷枚数であり、目録代の二円は実費であった。

交通費では、先に見た青森県への二回（二、五〇〇円・二、〇〇〇円）と群馬県の一回（二、〇〇〇円）が大きく、その他は、YMCAが担当した入場券販売のための市内交通費九〇円五〇銭であった。

その他、看守及夜警費は比較的大きい。また、額に敷く紙、返却用の包装紙や糊・墨汁などは消耗品費で、お茶や画鋏、夜食代など様々なものが雑費から支払われている。そのなかには、会場内の説明書きの清書と思われる「展示説明書執筆料」一四枚分で四二〇円などもあった。

おわりに

占領期であったために、開港に関する記念事業は、高島埠頭などの復興計画を絡めた式典と、おもいでの開港展が主なものというささやかなものであった。しかし、展示会では、団体入場者が多かったが、多くの入場者が訪れており、関心の高さを感じさせる。

【参考文献】

曾根妙子「戦後の市政記念事業と市史の編纂」(『市史研究よこはま』第一四号)二〇〇二年、大和久泰太郎「横浜YMCA百年史」(横浜キリスト教青年会一九八四年、『横浜市学校沿革誌』(横浜市教育局委員会)一九五七年。